

2021年4月21日発行（通算第544号）

世界情勢ブリーフィング

<https://guccipost.co.jp/blog/jd/>

■ 日米首脳共同声明（4月16日付外務省）

https://www.mofa.go.jp/mofaj/na/na1/us/page1_000948.html

菅首相が訪米し、バイデン大統領と初めての首脳会談を行いました。バイデンにとっては対面で会う初めての外国首脳でした。

日米首脳会談後、「日米首脳共同声明」が発出されました。また、別添文書として、「日米気候パートナーシップ」と「日米競争力・強靱性（コア）（Competitiveness and Resilience (CoRe)）パートナーシップ」という文書も発表されています。

日米首脳共同声明には1969年の佐藤・ニクソンの首脳会談後の声明以来、初めて台湾が言及されました。今回の首脳会談の意義について解説します。

日米首脳会談

● 日米首脳共同声明

全体として、驚くような場面はなく、予想どおりの結果でした。日米双方がそれぞれ必要としているポイントを押さえ、コミュニケーションがしっかりとれていることがうかがわれました。堅実な訪米と首脳会談だったと評価できます。

菅・バイデンの両首脳は1対1（テタテ）を20分、その後に政府高官を加えた拡大会合に移行。これ自体はよくあるアレンジです。テタテについては以下の記事で解説しましたが、小泉首相や安倍首相のような人なら1時間以上やったりしますが、普通の首脳はそこまでやりません。まして菅首相は初訪米、おそらく米側の意向もあり、わずか20分（通訳も考えるとその半分）ですから、挨拶程度の交流だったと思われます。

・ 「日米首脳会談」（18/4/25）

<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=5232>

テタテではハンバーガーがまったく食べられなかったことも含め話題になりましたが、わずかな時間、しかもマスク着用（おそらく飲食のときのみ外す）ということで、なかなか食べられるものではないですよ。いっそパンケーキで良かったのでは、とも思いましたが。

<https://twitter.com/POTUS/status/1383228979415437312>

この軽食以外に食事会がなかったことも含め、イベントは最小限に抑えられていました。日本側にしてみれば、バイデンと会う最初の首脳になるというのがまず重要で、米側にしてみれば、コロナ対策もあり、シンプルなアレンジの方が双方にとって都合が良かったと考えられます。ちなみにコロナ対策といえば、中国が外国要人を北京に入れなことを徹底している（ケリー気候変動問題担当特使も訪問しなかった）ことも思い出されます。

サブスタンスですが、成果文書である共同声明は、首脳レベルの声明としてはずいぶん長いものでした。その分、格調の高さは欠けますが、事務レベルにおいて、押さえるべきポイントをきっちり詰め込んだ印象です。

最も重要なポイントは言うまでもなく台湾です。これは次項で述べるとして、まず安全保障について、日本にとって重要な東シナ海と尖閣が押さえられました。北朝鮮も、完全な非核化と拉致を明記。韓国との関係が気になったところでしたが、FOIPの文脈でサラッと触れたのにとどまりました。米国としては、5月下旬に文在寅大統領を迎えることも念頭に置きつつ、3か国協力を強調したかったところでしょうが、日本の意向も踏まえて、無難な書きぶりだったと思います。あと、ミサイル発射への文句が入らなかったのは物足りないですが、まあ許容範囲でしょう。

あとは経済安全保障（技術、サプライチェーン）、気候変動、コロナですが、ここはまず基本的な方向性について認識を一致させたということだと思います。米国は、プリンケン国務長官、オースティン国防長官、サリバン大統領補佐官、キャンベルNSCインド太平洋調整官、ケーガンNSCアジア大洋州上級部長というレギュラー・メンバーに加え、イエレン財務長官、レモンド商務長官、メラニー・ナカガワNSC気候エネルギー担当上級部長を同席させました。経済安全保障に対する並々ならぬ思い入れを感じさせるラインアップです。

これに対し、日本側は、坂井官房副長官、阿達補佐官、和泉補佐官、北村NSS局長という官邸メンバーに外務省の高官（大使含む）という陣容で、経済担当は（一応）総理補佐官とNSS、外務省の経済外審のみ。経済安全保障は、国家の根幹をなす外交・安保・経済戦略に実務レベルの細かい規制や成長戦略を接続させる、極めて難しい課題です。NSSや各省で取り組みが始まったばかりということもあり、具体的対応の検討にはまだ時間が必要でしょう。今回はその本格化に向けたキックオフという位置づけだと思います。

それと、通商問題が入っていないのも興味深かったところです。トランプ政権では「日米貿易協定」が締結されましたが、この協定は第1段階に過ぎず、その後のフォローも想定されていたはず（以下の記事参照）。それが今回はまったく言及されませんでした。ということは、この件はトランプ政権（安倍政権）限りでとりあえず終わったのだらうと読み取ることができます。

- ・「日米貿易協定交渉の大枠合意」（19/8/26）
<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=7863>
- ・「国連総会（日米首脳会談）」（19/10/1）
<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=7956>

最後に、ハリス副大統領との関係を築くことも重要な意味があったと考えられます。ハリスは通常の政権の副大統領よりも実質的な役割を担っており、バイデンの後継者になることも念頭に置きつつ、外交への関わりが特に重視されているように感じられます。ハリスとの会談もアレンジされましたが、東京五輪で訪日する可能性もある中で、良い機会になったと評価できます。

●台湾と中国

さて、メインテーマである台湾について。首脳共同声明で言及されたのは1969年以来と言われていますが、当時は日米とも中国との外交関係はなく、中国を代表するのは台湾だったので、現在の日米中の外交関係になってからは初めてのことです。

その文言は、「日米両国は、台湾海峡の平和と安定の重要性を強調するとともに、兩岸問題の平和的解決を促す。」というもの。「2+2」では、「閣僚は、台湾海峡の平和と安定の重要性を強調した。」でしたから、ほとんど同じです。おそらく米国はより強い表現を入れたかたのようですが、日本としては、やはり中国との関係に配慮して、無難におさめたかたのが本音です。ここは日本の事情が十分に考慮された結果になっています。

ちなみに「台湾海峡」という言い回しも重要です。「台湾」と書くと、当然これは地理的概念で「中華民国」を指すものではないのですが、それでも、「台湾の平和と安定」という表現になると、「台湾の安全を重視する（＝台湾を守る）」という意味合いが（そうは読めない余地があるとしても）出てきてしまいます。ここで

「台湾海峡の平和と安定」と書けば、中立的な意味合いが示せるわけです。こういう文言選びは外務官僚のプロとしての腕の見せどころです。

なおこの点について、メディアにもよく登場する日本の「米国政治の専門家」の大学教授の方が、「台湾を防衛する」といった文言は入らなかったと指摘しているのを見ました。しかし、「台湾を防衛する義務」は米国すら負っていません（台湾関係法が定める米国の義務は台湾の防衛力の維持）。ですからこんな文言は最初から共同声明に入るわけがないのです。おそらくこの方は米中や外交分野の専門ではないのですが、それにしてもメディアが「識者」として紹介する人でも、こういう基本的なポイントを外している場合があるので、注意しましょう。

首脳会談後に米側の事前バックグラウンドブリーフの内容が公表されましたが、興味深いことに、ホワイトハウスの高官は、日本と中国との経済関係の深さは認識している、菅首相は慎重な方針を望んでおり、米国はそれを尊重する、と述べていました。メディアにここまではっきり言うのかと率直に言って驚きました。それだけバイデン政権は透明性を重視し、また日本との同盟関係のマネジメントにも心を砕いているということでしょう。

<https://www.whitehouse.gov/briefing-room/press-briefings/2021/04/15/background-press-call-by-a-senior-administration-official-on-the-official-working-visit-of-japan/>

さて、そういうわけで、2+2からさほど状況は変わっていないのですが、それでも中国にとっては、憂慮すべき事態です。そもそも2+2で台湾に言及されたことは、日本ではサラッと受け止められましたが（後述）、中国にとっては一大事でした。中国を代表する米中関係の専門家である時殷弘教授は、これまでの日本の方針からの重大な逸脱だったと指摘しています。実際、ここから中国の日本に対する論調は明確に厳しくなっています。

したがって、今回も、中国から相当に強い反応がくることが予想されました。しかし、興味深いことに、これまでのところ、中国の反応は予想外に抑制されています。

もちろん、中国外交部や駐日大使館は、日本は米国に付き従い、地域を不安定化させ、内政に干渉している、と非難しています。環球時報は、日本は敗戦国だから主権がない、中国の発展に嫉妬している、他の問題はまあ戯れで許してやってもいいが、台湾だけは許せない、大火傷をするぞ、と警告しています。これが一番本音に近い感じがします。

しかし、全体として、中国メディアの取り上げ方は地味です。上海のモーターショーもありましたが、日本企業へのボイコットの動きなどはありません。尖閣国有化のときなどと比べれば、比べものにならないほど静かです。

やはり今は、北京五輪もあり（日本の東京五輪とある意味で同じような立ち位置）、RCEPやTPPへの期待もあり、米中関係が改善の糸口が見えない中で、日本とことを構えるのは得策ではないと見ているのでしょうか。ここは現実的な判断が働いていることが見てとれます。また、先に述べたとおり、文言への細心の配慮も効いています。

むしろ、先に述べたとおり、日本の方で、国内で大きな議論が起こることもなく、サラッと台湾への言及を受け入れたことが興味深いともいえます。周辺事態法のときに台湾が含まれるか否かで大騒ぎした時とは大違いです。

当然ながら、日中をめぐる安全保障環境が大きく変わったことがその背景にあります。振り返ると、あの頃は、台湾に自制を求めるという論調が目立っていた面もありました。今は、台湾有事が起これば、日米が共同して対処しなければならない、それを明らかにしなければ、日本の安全保障も脅かされる・・・という情勢認識が、少なくともポリシーメーカー、そしておそらく大部分の国民の間で共有されたということです。時代は、そこまで変わったわけです。今後は当然、台湾有事における日本の役割分担の明確化という議論に進むでしょう。

とはいえ米国と日本が完全に同じ方針をとるわけではありません。国防以外では、立場も利害関係も違います。それは前述のとおり、米側の事前バックグラウンドブリーフでも米国が指摘していました。日本は米国についていけないといけませんが、中国を刺激するのが怖いので、日米の発信では米国を押しえないといけな
い・・・それはそれで一面の真実ですが、今の時代は、むしろ、日本がどのように中国の脅威を抑えながら、同時に中国との関係において実利をとる、という主体的な思考をもち、そのために米国とのパートナーシップを活用する、そういった戦略が追求される段階になっているということです。これも時代の変化を強く感じさせます。

●台湾侵攻のリスク

では、台湾有事のリスクはどれほどなのか。習近平は、19年1月2日の「台湾同胞に告げる書」の40周年記念式典での演説で、中国と台湾の統一に向けた強い意思を強調しました。自らの在任中に実現することへの意欲が見てとれました。

しかし、不測の事態さえなければ、習近平が23年から3期目に入ることはほぼ確実ですから、そこまで急ぐ必要はありません。今年が共産党創立100周年、来年2月に北京五輪、22年秋に第20回党大会を控える中で、自身の続投を危うくさせる事態はなんとしても避けたいところです。

次のターゲットは27年の人民解放軍創立100周年、そして28年の国家主席の任期満了ですが、このとき習近平はまだ74歳。4期目に入ることは十分に可能です。台湾侵攻が失敗したときのリスクの大きさ、中国の経済規模と軍事力が向上を続けることを考えると、相当に長いスパンを念頭に置いている（おそらく2030年以降）と考えられます。

中国が台湾の防空識別圏（ADIZ）への侵入を執拗に続け、米国や日本を激しく牽制するのは、台湾の独立宣言や米国の「戦略的曖昧さ」「一つの中国」政策の変更といった現状の根本的変更を阻止するためです。ADIZへの侵入も、95～96年の台湾海峡危機の際に行われた軍の再配置やミサイル発射実験に比べると、戦争を誘発する程度は抑えられています。そうした軍事的圧力を加えつつ、外交的に孤立させ、台湾を諦めさせようとしている（それにより統一を余儀なくさせる）わけです。

とはいえ、こうした強圧的な姿勢は、中国に対して最も強硬なスタンスをとる民進党を助けることになりま
す。米国は台湾への武器供与をさらに強化させるでしょう。基本的には現在の状況が続きますが、偶発的な衝突を含め、軍事行動のリスクは次第に高まっていくことは避けられません。

日本との関係では、トランプ政権時代の中国との融和的な関係はもはや維持できなくなると思います。台湾有事への対応のみならず、経済安全保障、「デカップリング」をめぐる議論がさらに重要な課題になります。この点はまた追って取り上げたいと思います。

あとがき

■ ノーヒッターの秘密？（4月10日付ダルビッシュ有のブログ）

<https://ameblo.jp/darvish-yu-blog/entry-12667699442.html>

今シーズンも大活躍を続けるダルビッシュ選手の五本指ソックス・・・これは、私も以前に以下の記事のあとがきで書いたものです。

<https://guccipost.co.jp/blog/jd/?p=7009>

しかし、このときは日常生活でも使っていると書きましたが、今は家で仕事をすることが多いので、靴下を履いて長時間外にいることが減りました。ゴルフとジムでは変わらず利用していますが。

ゴルフといえば、松山英樹監修モデルという5本指の靴下を見かけました。マスターズ優勝にあやかって、使

ってみますかね・・・。

それにしても、靴下だけではなく、スーツやワイシャツを着る機会もすっかり少なくなりました。たまに着て外に出ると疲れるほどです。アフターコロナの世界に戻るのが逆に不安になったりします（苦笑）。

The Gucci Post (Copyright 2021 グッチーポスト株式会社)

- Twitter <https://twitter.com/JDWorldBriefing>
- ブログ <https://guccipost.co.jp/blog/jd/>
- メール jd.world.briefing@gmail.com
- 編集部 inquire@guccipost.co.jp

※本メルマガの内容は、筆者の個人的な見解であり、他のいかなる個人の見解を代表ないし代理するものではなく、他の個人または組織がその内容に対して責任を負うことはありません。